

第3章 物集女城跡の歴史環境

1 歴史環境

〔1〕 物集女城跡周辺の遺跡と主要な調査成果

物集女城跡が築かれた「大字物集女」地域には、14の遺跡が点在している。扇状地から沖積低地にかけては、集落・生産遺跡である中海道遺跡をはじめ北ノ口遺跡、西ノ岡遺跡、南条遺跡、物集女車塚古墳周辺遺跡があげられる。また、段丘上には18基の古墳が確認でき、首長墓である中期の南条古墳(3号墳)、後期の物集女車塚古墳のほか、中期の南条古墳群や東山古墳群、後期の「物集女ノ群集墳」が形成されている。

物集女城跡は中海道遺跡の中心部に位置する。したがって、城館に関連する遺構と弥生時代後期～古墳時代前・中期、平安時代の遺構が重複して確認されることが多い。

中海道遺跡はこれまでに、74次の調査が実施されている。最古の人間活動の痕跡は、後期旧石器時代まで遡り、削器や細石刃が確認されている(19次)。また、同じ調査地では縄文時代晩期末の深鉢(長原式期)が確認されているが、確実な遺構は未確認である。

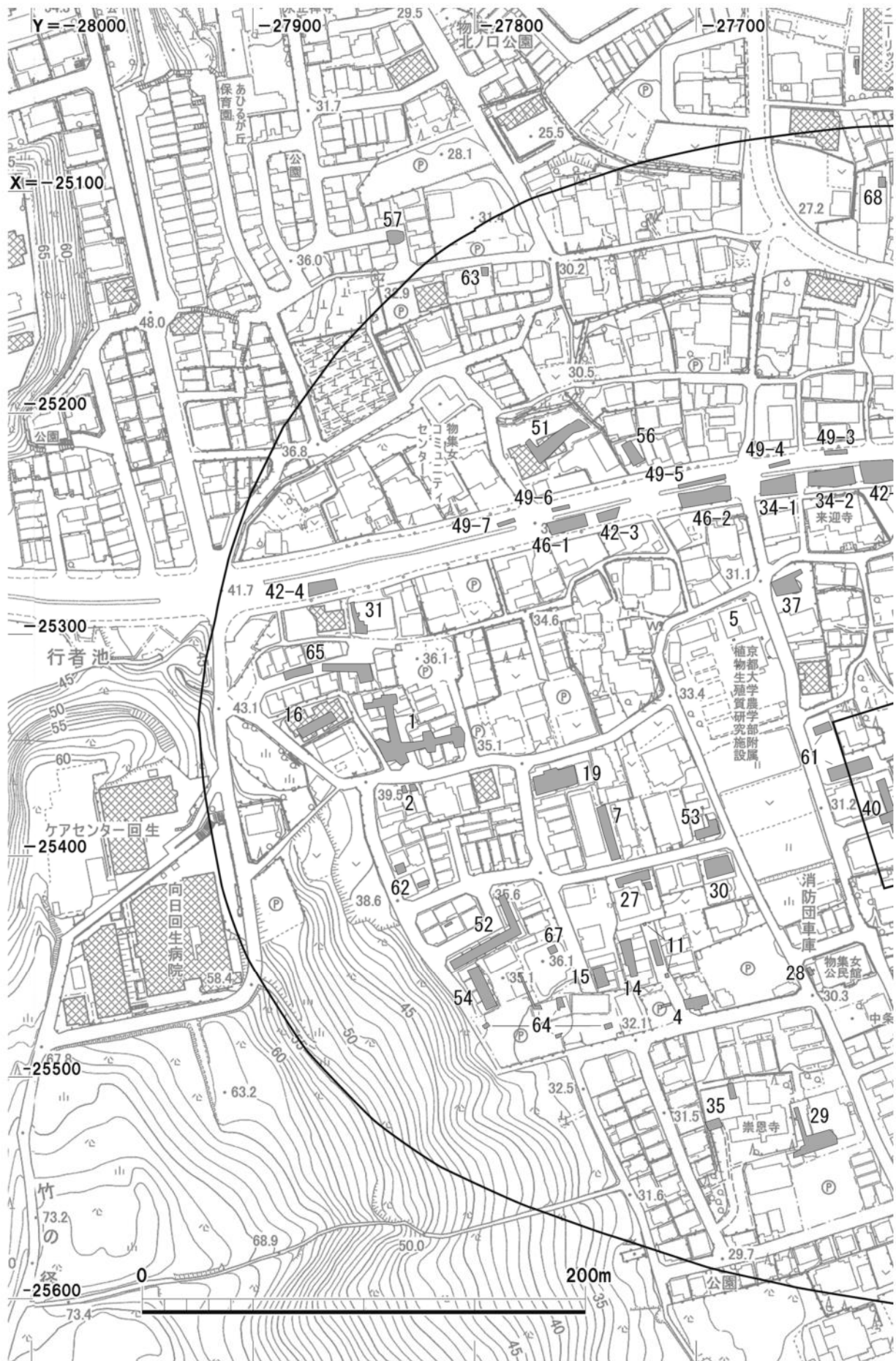
古墳時代 集落の形成は、弥生時代後期後半(32・34・42次)に始まり、古墳時代前期初頭(庄内式期)に盛行期を迎え(32次)、その後衰微していくが、中期初頭にふたたび活性化する。

とくに、32次調査で確認された古墳時代初頭の四面庇付掘立柱建物は、首長の祭政施設である蓋然性が高い。わが国最古段階の前方後円墳である五塚原古墳の築造時期に近く、古墳被葬者の政治拠点と思われる。^(文献1)この建物の棟方位は北西～南東を向き、「中条」周辺の斜行地割と同じ指向性が看取されることは注意を要する。

古墳時代中期までの堅穴建物は総数32棟、掘立柱建物3棟が確認されている。中期の遺構は、堅穴建物7棟(3次:3棟、17次:2棟、18次:1棟、49次:1棟)、溝1条(21次・73次)、土坑1基(3次)である。すべてが堅穴建物であり、一辺3～4m程度の規模で揃い、際だった特徴はうかがえない。弥生時代後期に掘削された水路は、中期前葉までの利用が認められる(第73次)。4世紀末頃には、韓式系土器や初期須恵器が持ち込まれ、渡来系集団の招来を想起させる。京都盆地で宇治市街地遺跡とな^(文献2)り最初に渡来人が居住した地域とみられる。

いっぽう、後期の遺構は、確認されていない。物集女車塚古墳に最も近い位置にあたるが、被葬者集団が居住した形跡はうかがえない状況にある。継体天皇の近臣が、葬地だけを宛がわれた可能性も考え^(文献3)られる。

王権中枢と親近性の高い要素を備えた首長墓である物集女車塚古墳は、墳丘の外表施設に段築、葺石、埴輪を揃え、埋葬施設は「畿内型」横穴式石室を構える。さらに、組合式家形石棺を配置し、冠、装飾大刀・馬具、武器、装身具など当代随一の優品を副葬する。古墳の築造年代は6世紀前葉であり、7世紀初頭まで3人の追葬がおこなわれた。石室と棺の格式からみた王権中枢部における政治階層的地位は、市尾墓山古墳や東乗鞍古墳などの「大臣・大連」級古墳の次に位置づけられる。^(文献4)また、金銅装馬具や銀



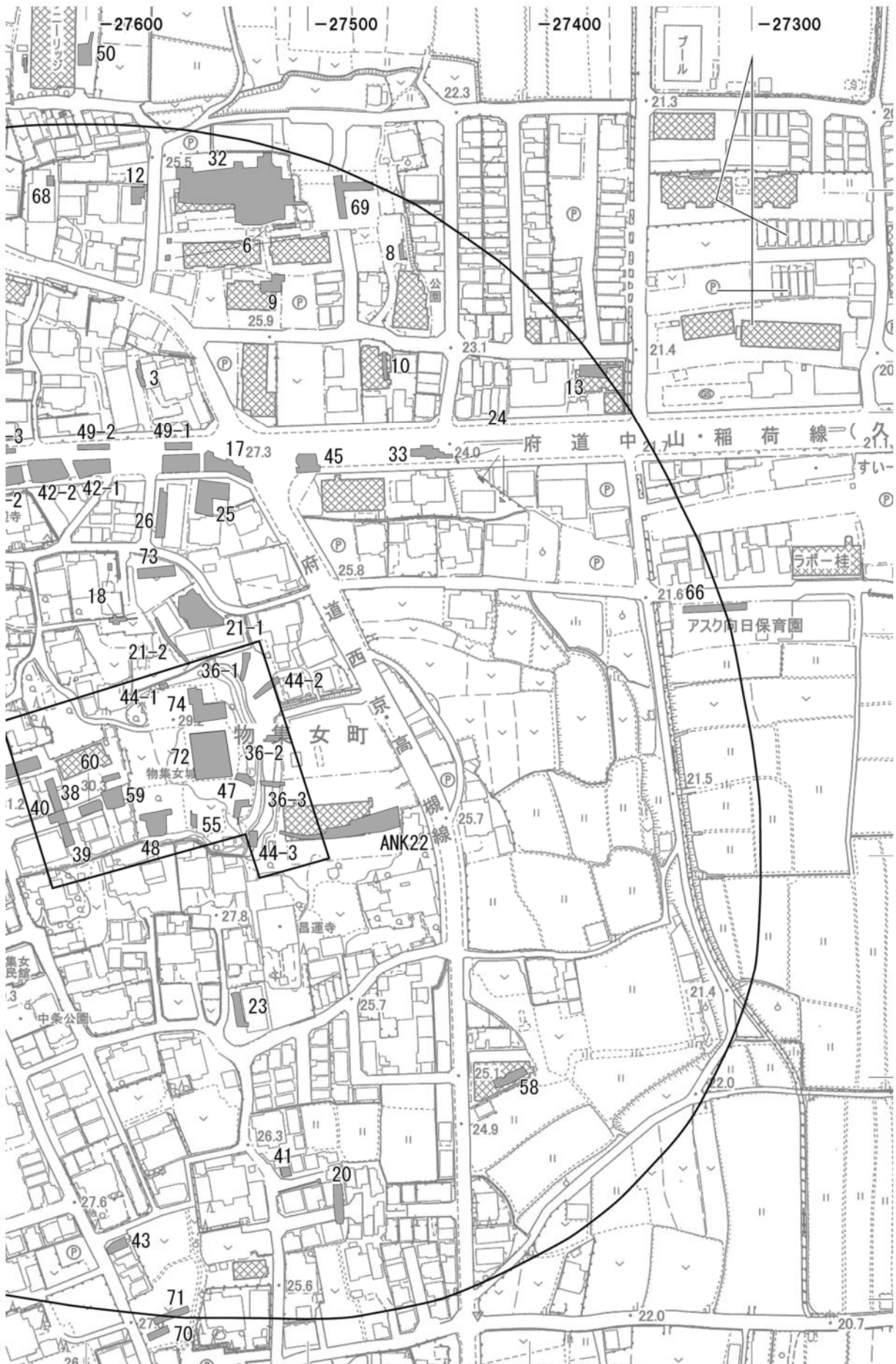


表-1 中海道遺跡調査一覧

略称(ANK:中海道遺跡 ZM:物集女城跡)

調査回数	物集女城	略称	調査地(小字)	調査機関	調査期間
第1次		ANK1	中海道	向日市教育委員会	昭和46(1971)年3~4月
弥生時代後期の溝状遺構、古墳時代前期の土坑を確認					
-	第1次	ZM1	中条	向日市教育委員会	昭和56(1981)年9~10月
物集女城跡一帯の測量調査を実施					
第2次		ANK2	中海道	向日市教育委員会	昭和57(1982)年5月
弥生時代終末の溝を確認					
第3次		ANK3	御所海道	向日市教育委員会	昭和57(1982)年10月
古墳時代前期の堅穴建物を確認					
第4次		ANK4	中海道	向日市教育委員会	昭和58(1983)年1月
弥生時代後期の堅穴建物を確認					
第5次		ANK5	中条	京都大学	昭和58(1983)年1~2月
縄文時代中期・後期の縄文土器が出土					
第6次		ANK6	ヲサン田	向日市教育委員会	昭和58(1983)年2月
弥生時代後期の土坑・溝、古墳時代前期の土坑を確認					
第7次		ANK7	中海道	向日市教育委員会	昭和59(1984)年5~6月
古墳時代前期の堅穴建物、奈良~平安時代の掘立柱建物を確認					
第8次		ANK8	ヲサン田	向日市教育委員会	昭和59(1985)年10~11月
弥生時代後期~古墳時代前期の溝を確認					
第9次		ANK9	ヲサン田	向日市教育委員会	昭和59(1985)年10~11月
弥生時代後期の堅穴建物・土坑を確認					
第10次		ANK10	クズ子	向日市教育委員会	昭和63(1988)年1月
奈良~平安時代初頭の溝群を確認					
第11次		ANK11	中海道	向日市教育委員会	昭和63(1988)年1月
弥生・奈良~平安・中世の遺物が出土					
第12次		ANK12	北ノ口	(財)向日市埋蔵文化財センター	昭和63(1988)年5月
弥生時代終末~古墳時代初頭のベツト状遺構をもつ堅穴建物を確認					
第13次		ANK13	クズ子	(財)向日市埋蔵文化財センター	昭和63(1988)年5月
弥生時代終末・平安時代初期の遺構を確認					
第14次		ANK14	中海道	(財)向日市埋蔵文化財センター	昭和63(1988)年10月
弥生時代後期の堅穴建物を確認					
第15次		ANK15	中海道	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成元(1989)年3~4月
弥生時代後期~古墳時代前期の土坑・溝を確認					
第16次		ANK16	中海道	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成元(1989)年6~7月
縄文時代晩期の土坑状遺構、弥生時代後期の円形周溝状遺構を確認					
第17次		ANK17	御所海道	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成元(1989)年11月~ 平成2(1990)年2月
古墳時代の堅穴建物、奈良・平安時代の掘立柱建物、中世の溝を確認					
第18次		ANK18	中条	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成元(1989)年12月
古墳時代後期の堅穴建物、13世紀前半の溝・土坑を確認					
第19次		ANK19	中海道	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成2(1990)年4~5月
旧石器時代の石刃・剥片が出土 弥生時代終末の土坑を確認					
第20次		ANK20	森ノ上	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成2(1990)年5~6月
古墳時代前期の土坑状遺構を確認					
第21次		ANK21	中条	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成4(1992)年6~7月
弥生時代終末~古墳時代の大溝、13~14世紀の石組み井戸を確認					
第22次		ANK22	中条	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成4(1992)年8~10月
弥生時代終末~古墳時代の土坑、古墳時代の溝を確認					
第23次		ANK23	中条	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成4(1992)年9~10月
11世紀後半の土坑を確認					
第24次		ANK24	クズ子	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成5(1993)年12月~ 平成6(1994)年1月
検出遺構無し					
第25次		ANK25	御所海道	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成6(1994)年1~2月
弥生時代の素文鏡が出土					

第26次		ANK26	御所海道	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成6(1994)年2～3月
中世の流路跡を確認					
第27次		ANK27	中海道	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成6(1994)年6～7月
弥生時代後期の竪穴建物、奈良～平安時代の掘立柱建物を確認					
第28次		ANK28	中条	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成6(1994)年9月
時期不明の流路跡を確認					
第29次		ANK29	中海道	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成6(1994)年11～12月
古墳時代初頭の土坑・溝、奈良時代の掘立柱建物・柵、平安時代前期の掘立柱建物・柱穴群を確認 大覚寺同範瓦が出土					
第30次		ANK30	中海道	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成7(1995)年1～2月
鎌倉時代の柵を確認 奈良～平安時代の土器類が出土					
第31次		ANK31	中海道	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成7(1995)年1～2月
中近世の溝・土坑を確認					
第32次		ANK32	ヲサン田	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成7(1995)年7～11月
古墳時代初頭の大形掘立柱建物を確認					
第33次		ANK33	クズ子	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成7(1995)年9月
古墳時代初頭の竪穴建物を確認					
第34次		ANK34	御所海道	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成7(1995)年9～11月
弥生時代後期の竪穴建物を確認					
第35次		ANK35	中海道	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成7(1995)年10月
14世紀初頭の溝状の凹みを確認					
第36次	第2次	ZM2・ANK36	中条	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成7(1995)年10～12月
物集女城東堀の規模を確認					
第37次		ANK37	中条	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成8(1996)年4月
13世紀の石組み溝を確認					
第38次		ANK38	中条	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成8(1996)年4～5月
16世紀の柵・土坑・柱穴群を確認					
第39次		ANK39	中条	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成8(1996)年4～5月
16世紀の柵・土坑・柱穴群を確認					
第40次		ANK40	中条	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成9(1997)年1月
古墳時代前期末の竪穴建物、中世のピット群を確認					
第41次		ANK41	森ノ上	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成9(1997)年5月
平安時代と思われる溝・土坑を確認					
第42次		ANK42	御所海道	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成8(1996)年11月～ 平成9(1997)年2月
弥生時代後期の竪穴建物、古墳時代後期初頭の竪穴建物、15世紀前半の土坑を確認 縄文時代晩期の土器が出土					
第43次		ANK43	堂ノ前	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成8(1996)年11月
中世の柱穴群を確認					
第44次	第3次	ZM3・ANK44	中条	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成8(1996)年11～12月
東堀・北堀の調査					
第45次		ANK45	クズ子	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成9(1997)年3月
弥生時代終末～古墳時代初頭の小形ピット群を確認					
第46次		ANK46	中海道	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成9(1997)年5～7月
弥生時代後期の竪穴建物を確認					
第47次	第4次	ZM4・ANK47	中条	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成9(1997)年10～11月
東土塁の位置、規模、構造、構築年代を確認					
第48次	第5次	ZM5・ANK48	中条	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成10(1998)年5～6月
土塁南西隅部を検出し、物集女城が南北約75m、東西約70mの方形単郭式の城館であることが確定					
第49次		ANK49	中海道	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成10(1998)年11月～ 平成11(1999)年1月
古墳時代中期の竪穴建物を確認					
第50次		ANK50	池ノ裏	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成11(1999)年12月
古墳時代前期の水田遺構を確認					
第51次		ANK51	中海道	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成12(2000)年7～8月
平安～中世の溝・柱穴群を確認					
第52次		ANK52	中海道	(財)向日市埋蔵文化財センター	平成12(2000)年7～8月
弥生時代後期の竪穴建物、15世紀に埋没する大溝を確認					

第53次		ANK53	中海道	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成12 (2000) 年 9 ~ 10月
10世紀後半の大形建物を確認					
第54次		ANK54	中海道	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成12 (2000) 11月
15世紀に埋没する大溝を確認					
第55次	第 6 次	ZM6・ANK55	中条	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成12 (2000) 年11~12月
南土塁の位置、規模、構造および時期を確認					
第56次		ANK56	御所海道	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成13 (2001) 年 6 月
13世紀前半を下限とする整地関連遺構を確認					
第57次		ANK57	北ノ口	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成13 (2001) 年 8 月
検出遺構無し					
第58次		ANK58	森ノ上	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成14 (2002) 年 2 ~ 3 月
飛鳥~奈良時代に埋没した流路跡を確認					
第59次	第 7 次	ZM7・ANK59	中条	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成14 (2002) 年 2 ~ 3 月
「西外郭」で16世紀中頃の柱穴群を確認					
第60次	第 8 次	ZM8・ANK60	中条	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成14 (2002) 年 8 ~ 9 月
16世紀前半~中葉下限の建物群を確認					
第61次	第 9 次	ZM9・ANK61	中条	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成14 (2002) 年 9 ~ 11月
10世紀後半の廃棄土坑、物集女城に関連する溝、柵を確認					
第62次		ANK62	中海道	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成15 (2003) 年 9 月
奈良時代以前の溝を確認					
第63次		ANK63	北ノ口	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成15 (2003) 年 9 月
段丘を削り込む開析谷の一部を確認					
第64次		ANK64	中海道	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成17 (2005) 年 6 ~ 7 月
13世紀の土塁状遺構を確認					
第65次		ANK65	中海道	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成18 (2006) 年 7 ~ 8 月
弥生時代後期の堅穴建物、土器溜まりを確認					
第66次		ANK66	森ノ下	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成18 (2006) 年 8 ~ 9 月
弥生~古代の流路跡を確認					
第67次		ANK67	中海道	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成19 (2007) 年 5 月
時期不明の溝を確認					
第68次		ANK68	北ノ口	(財) 向日市埋蔵文化財センター	平成21 (2009) 年 5 ~ 6 月
旧地形の傾斜面を確認					
第69次		ANK69	ヲサン田	(公財) 向日市埋蔵文化財センター	平成26 (2014) 年10月
古墳時代初頭の堅穴建物・溝・井戸状遺構、10世紀前半の柱穴群を確認					
第70次		ANK70	堂ノ前	(公財) 向日市埋蔵文化財センター	平成27 (2015) 年10月
13世紀の溝・柱穴を確認					
第71次		ANK71	堂ノ前	(公財) 向日市埋蔵文化財センター	平成27 (2015) 年10月
平安~中世の溝・柱穴群を確認					
第72次	第10次	ZM10・ANK72	中条	(公財) 向日市埋蔵文化財センター	平成28 (2016) 年11月~ 平成29 (2017年) 1 月
初めて主郭内を調査し、城館に関わる遺構・遺物が良好に遺存していることを確認					
第73次		ANK73	中条	(公財) 向日市埋蔵文化財センター	平成29 (2017) 年 2 ~ 3 月
古墳時代前期の溝、物集女城に関連する土塁状遺構を確認 陶質土器・韓式系土器が出土					
第74次	第11次	ZM11・ANK74	中条	(公財) 向日市埋蔵文化財センター	平成30 (2018) 年 1 ~ 3 月
北土塁の位置、規模、構造を確認					
第75次		ANK75	中条	(公財) 向日市埋蔵文化財センター	令和元 (2019) 年 7 ~ 9 月
平安時代前~中期の柱穴を確認					
第76次		ANK76	御所海道	京都府教育委員会	令和元 (2019) 年 6 月
流路跡を確認					
第77次		ANK77	中条	(公財) 向日市埋蔵文化財センター	令和 3 (2021) 年11~12月
10世紀後半の廃棄土坑を確認					
第78次		ANK78	中条	(公財) 向日市埋蔵文化財センター	令和 3 (2021) 年12月
近世の貯水施設・暗渠溝を確認					
第79次		ANK79	寺戸町正田	(公財) 向日市埋蔵文化財センター	令和 4 (2022) 年11~12月
中海道遺跡周辺 (東辺部) における調査					

装鉄矛などの豊富な武器類をもつ。しかし、甲冑が無いことから被葬者に武装した姿は描き難い。

なお、物集女車塚古墳には、中期の大型古墳の埋葬施設に備わる長持形石棺が転用されている。かつて、物集女地内の耕作地からは同種の棺材が別に確認され、丘陵斜面では結晶片岩がまとまって出土している。物集女地域には、中期前葉の恵解山古墳が出現したのち、盟主的首長墓が築造されていた可能性を想定することもできる^(文献2)。

長岡京期 長岡京の条坊道路である一条大路から北側へ10町半ほど離れた場所で、古墳の墳丘を築山にみたてた離宮がつくられている。古墳は6世紀中葉に築かれた継体大王に近侍した豪族の墓に比定される物集女車塚で、近世までは淳和天皇の火葬に際して平安京から亡骸を運んだ御車を納めた場所との伝承を有している。

この離宮は、宮城の西辺を画する西一坊大路から一本東側にあたる西一坊坊間西小路の延長上に回廊を築いており、条坊道路の配置計画にしたがって造営されている^(文献5)。古墳を借景に取り込み、回廊をめぐるらせて内部に大形掘立柱建物が配置する。建物は東西棟で柱間を等しく10尺に設け、南北二面に廂を備える。柱穴からは離宮に固有の勅旨所をあらわす、「旨」字を陽刻した軒平瓦が出土している。また、墳丘上にも同様な瓦が散在しており、築山のなかに瓦葺の建物がつくられていた可能性もある。古墳の周濠は埋められており、州浜などへの改変は行われていなかった。

古墳を利用した苑地内の施設は、平城宮の松林苑内においても確認することができる。同様に猫塚古墳の墳丘を築山に使うが、そこでは周濠を利用して州浜に改修し苑池を築いている。いずれも天皇の遊宴に使われた施設と考えられる。

平安時代 第53次調査では、10世紀後半の大形掘立柱建物が確認されている。緑軸・灰釉陶器がまとまって出土しており、輸入陶磁器（白磁）を伴う等の状況は、本調査地の西北約60mで確認された土壌S K 0902（第61次第2トレンチ）出土の一括遺物の様相と近似し、両地点の遺構は同時期の相互関連性をもつものとみられる。

第29次調査では、奈良・平安時代の掘立柱建物が5棟と溝群などが確認されている。溝群についてはほぼ真東西を向くことから、長岡京に通じる正方位の地割の存在が想定されている。また、大形の柱掘り方を伴う平安時代の掘立柱建物については、同時期にみられる他の遺構の要素を勘案して、「官衙的様相をそなえている」と評価されている^(文献6)。この造営年代については、出土遺物からみて9世紀前葉頃とみられる。第53次の大形建物は10世紀後葉につくられたものであり、第29次の建物群とは一世紀分の年代的間隙がある。

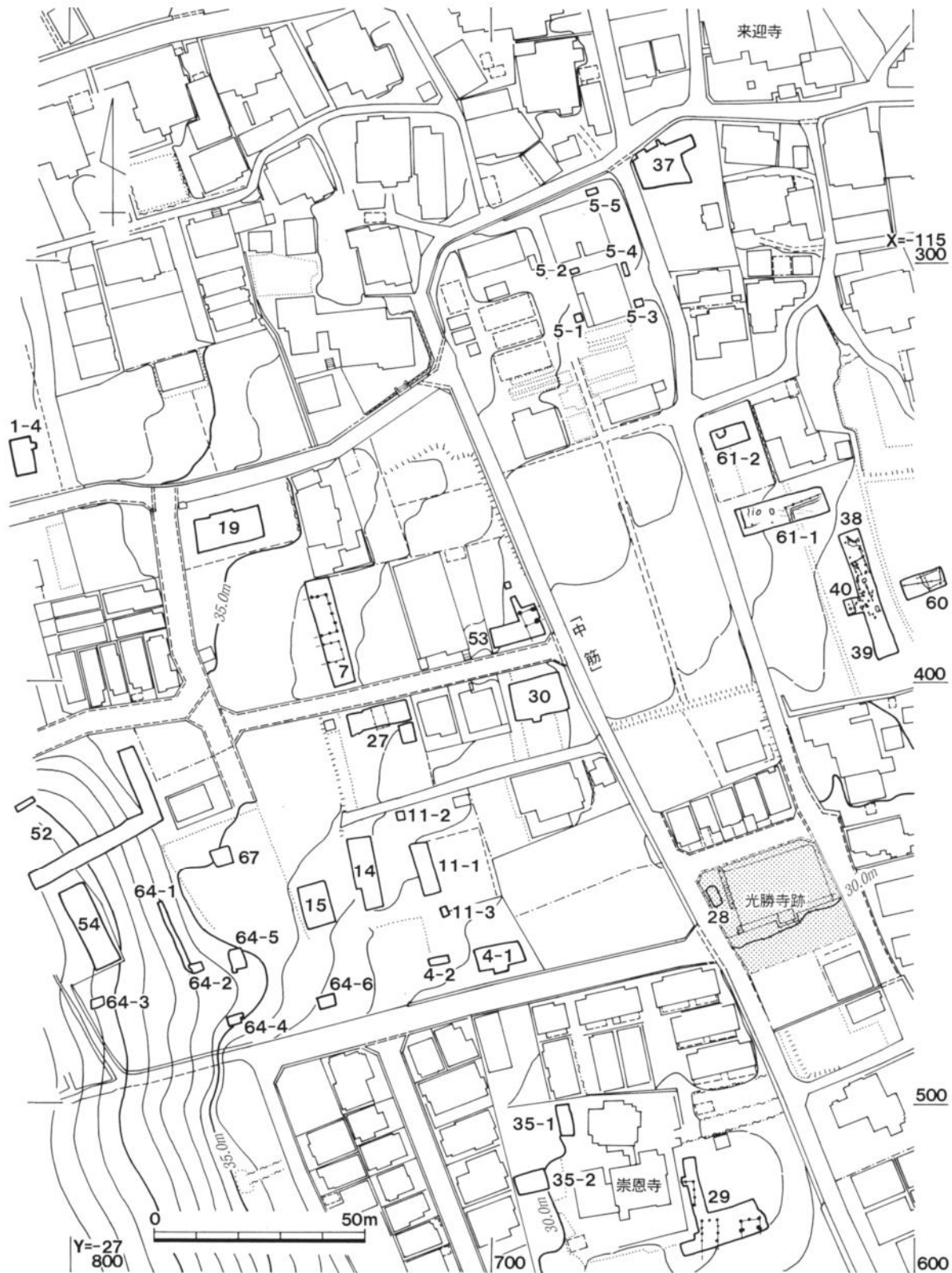
（2）古代・中世寺院の成立と展開

中海道遺跡の歴史時代は、これまでの調査によって官衙とともに寺院の要素も看取されることが遺物の様相を通じてうかがえていた^(文献7)。また、文献史料や既存の寺院が所蔵する仏像などから、平安時代まで創建を遡らせて考えることができる寺院の存在は十分に想定可能であった。

ここでは勅額寺としての伝承をもつ光勝寺と「元弘寺」をとりあげて、考古資料とつきあわせながら両寺説の在り方について検討をおこなう。

光勝寺 明和8（1771）年に製作された「明和八年長野山見分絵図」によれば、本調査地の南東約80m付近、現在の物集女公民館が建てられた場所には、明治9年に廃寺となった近世光勝寺の境内が

所在した。当寺院の本尊は薬師如来座像で、阿弥陀如来座像とともに平安時代後期の伝来仏である。現在は来迎寺に薬師堂が建てられ、そこに安置されている。江戸時代にまとめられた『薬王山光勝寺略縁起』によれば、創建は弘仁9(818)年で嵯峨天皇が天下の悪病を平治するために薬師如来を本尊として建立したと伝える。また、淳和天皇はたびたび行幸され、崩御の後は当寺で火葬されたという。



第18図 光勝寺・元弘寺の位置と周辺の成果

御廟の上には方篋印塔一基が建立された。久寿2（1156）年、兵火のために光勝寺の堂舎は焼失したが、本尊は無事であった。文明年間には物集女筑前守善繼が、伝来の薬師如来（文献8）に深く帰依し、一堂舎を建てて祈願所としたらしい。現在、来迎寺には光勝寺伝来の貞和4（1348）年銘のある宝篋印塔が伝わるが、寺伝にある記載はこれがもとなった可能性が高い。また、創建にかかわる伝承は、当地が承和7（840）年に淳和天皇の葬送地となっていたことに由来するものと思われる。

既述のとおり、物集女車塚古墳を借景に取り込んだ離宮もしくは別業のような長岡京期の施設が存在した。また、中海道遺跡のこれまでの調査においても、難波宮式軒平瓦（第27次出土）、長岡宮式7171型式軒丸瓦（第1次出土）、長岡宮式鬼面文鬼瓦（第22次出土）、平安時代中期の軒瓦類、「平安時代終末期」の複弁六弁蓮華文軒丸瓦と剣頭文軒平瓦および右卷巴文軒丸瓦（第29次出土）などが出土している。さらに、物集女車塚古墳の墳丘からは、長岡宮式7722D型式・同751・752型式軒平瓦、その北側隣接地では長岡宮式7193Aa型式軒丸瓦・同7722A型式軒平瓦が確認されている。

長岡京期～平安時代初頭においては、天皇との関わりが濃厚な地域として評価でき、その後の展開もこのような脈絡の延長で考えることができる。また、当地が淳和天皇の葬送地となった背景には、淳和の生前に当地と何らかの関わりがあったことを想起させる。とくに、物集女車塚古墳の周辺に想定される長岡京期の離宮相当施設はそのことを暗示している。なお、淳和は桓武の第三皇子で、母である藤原旅子とは二歳の特に死別している。平安遷都の時には8歳であったから、長岡京期は幼少期にあたる。長岡京期から承和7（840）年の崩御までの約50年の間に、光勝寺の寺伝が言うように、淳和は当地を訪れることがあったのかもしれない。したがって、光勝寺の寺伝については一部は史実を伝えている可能性もあり、これが成立し得る歴史的な素地は十分にあったといえよう。

物集女に平安時代まで遡る寺院があったとすれば、淳和の供養を行う寺院が建立されていたことが想起される。光勝寺伝来の平安後期の仏像は、そのような沿革をもつ寺院に奉られたものとしてみることもできよう。また、53次調査で確認された10世紀後葉の大形建物は、このような寺院に関わる施設として考えることも可能になってくるわけである。

元弘寺 近世の光勝寺境内の西側には、崇恩寺が所在する。寺伝によれば元弘年間（1331～34年）に後醍醐天皇が後鳥羽天皇の菩提のために建立した「元弘寺」を前身とするらしい。その後、荒廃し旧跡だけが残ったが、文明2（1470）年に至り、桂林和尚が一堂を建てて再興した。この時、寺号を崇恩寺に改め、桂林の師である夢窓疎石内派の笠雲漣禅師を講じて開山とし、天龍寺末の寺院となった。

「元弘寺」については、永和2（1376）年および至徳2（1385）年に記された『仁空置文』のなかに見ることができる。この文献史料は、西山三鈷寺の学僧仁空（1309～1388年）の遺言状で、三鈷寺の相承、所属寺院、寺領などの処置について規定されている。

一山城國物集女庄事

故千種相公忠顯卿經 奏開。爲後醍醐天皇勅願。於當庄内後鳥羽院御影堂邊。建立天台教院。號元弘寺。即以此庄爲寺領之元首。先師和尚爲開山住持兩三廻之後。令附屬仁給訖。而時移事變當。左多年爲天龍禪院所領。不便之最何事如之。後鳥羽院法皇御手印宸筆勅書以下。代代手實券契等不朽而猶留函底。仁遣弟等若有德政之時者。早申達建立寺院。可爲講院之濫觴矣。

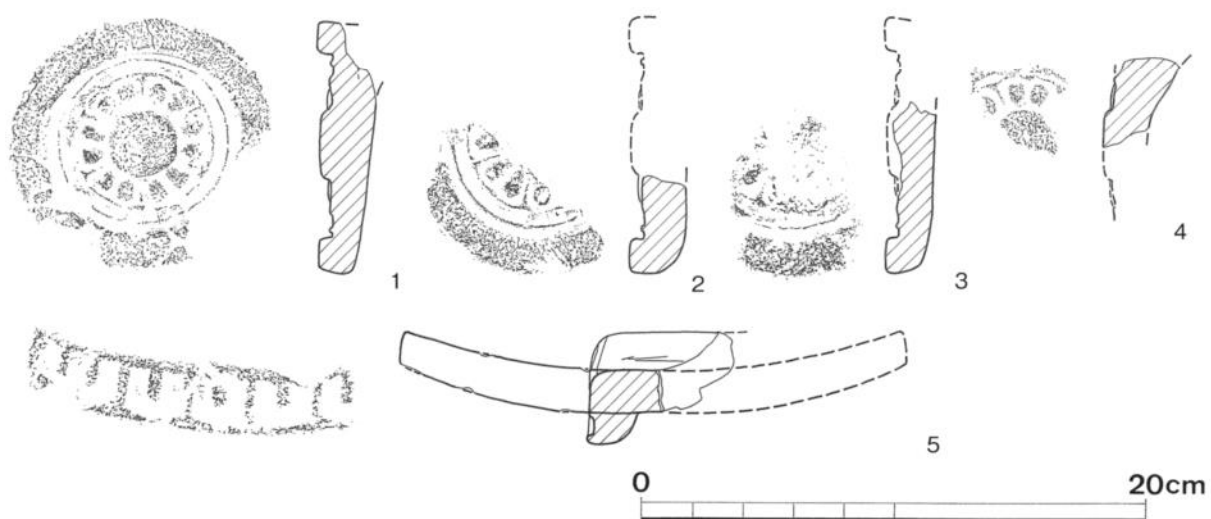
この内容を見れば、「故千種忠顯卿（～1336年）の発願で、後醍醐天皇の奉為により物集女庄の後鳥

羽天皇御影堂のあたりに、天台宗の元弘寺を建て物集女匠を寺領とした」、ことが窺える。また、「仁空が相承した三鉢寺の二代前の住持、示導（広慧和尚）が閉山となり、のち仁空が伝持したが、寺領はいま天龍禅院の所領となっている」、とみえる。寺領庄園の権益が侵害されていたらしく、「後鳥羽院御手印勅書など証文もあるから、徳政の時が来れば、遺弟等上申して回復し、庄園の収入で教銭を建てよ」、と遺言^(文献9)されている。

元弘寺・崇恩寺に隠する沿革は、以上のほかにはわかっていない。発掘調査においても、両寺院にかかわる遺構は、未確認である。ただし、現崇恩寺の南東側に隣接して実施された第 29 次調査地出土の「平安時代終末期」とされた軒瓦については、「元弘寺」にかかわりのある遺物である可能性がある。すなわち、複弁六弁蓮華文軒丸瓦と剣頭文軒平瓦、および右巻巴文軒丸瓦の三種である。前二者については、上原真人によって「大覚寺第Ⅱ期瓦群」^(文献10)と呼ばれているものである。

第 29 次調査では、複弁六弁蓮華文は三個体分出土している。瓦当面径約 10cm の小形軒丸瓦で、大覚寺 DKMⅡ 型式に相当する。凸型の中房は大きく、先行型式に見られた「卍」や数字の陽刻や珠文はない。また、丸瓦部を瓦当裏面にあてて接合する。暗茶褐色とうす灰青色の二種がある。胎土は粗く、焼成はやや軟質である。天龍寺^(文献11)、仁和寺^(文献12)、東寺^(文献13)、京大医学部遺跡などで出土している。これに共伴する瓦として剣頭文軒平瓦がある。大覚寺 DKH 14 型式に相当し、平瓦部の凹面側には瓦当近くに窺記号が施される。弧線と直線の二本からなる弓形の表現で、沈線は浅く極細である。大覚寺分類の窺記号Ⅲ a 類に近似する。この表現は共に出土した丸瓦のなかにもみられる。軒瓦のセット関係と窺記号の在り方は、「大覚寺第Ⅱ期瓦群」の基本構成や特徴をそなえている。

それではこれらの瓦はいつ、どこに供給されたものであろうか。「大覚寺第Ⅱ期瓦群」に与えられた年代観は、上原真人によれば下限を 14 世紀初頭におくことができるという。また、大覚寺史のなかで後宇多上皇による再興が進展する元享元（1321）年よりも以前に位置づけられ、龜山上皇の時期に伴う可能性を示唆^(文献15)されている。ところが、この下限年代についてはもう少し時期を下らせて考えることができるようである。



土坑 SK2959 [1・3・5] 土坑 SK2912 [2] 包含層 [4] 複弁六弁蓮華文軒丸瓦 [1～4] 剣頭文軒平瓦 [5]

第 19 図 元弘寺の創建瓦

平成16(2004)年に実施された旧天龍寺境内における調査で、八幡神を祀ったとされる霊庇廟(鎮守社)^(文獻11)にかかわる遺構からDKM11型式が出土した。この遺構は溝128という創建期の霊庇廟の区画溝のひとつで、南北方向に走行し、幅1.2～2.0m、深さ0.4～0.5mの規模で総延長約14m分が確認された。遺物は上層より平安京・京都編年のⅦ期(新)～Ⅷ期(中)^(文獻16)の土師皿が出土した。

天龍寺は後醍醐天皇の菩提を弔うために足利尊氏が夢窓国師を閉山として暦応2(1339)年～康永4(1345)年にかけて造営された。霊庇廟も康永3(1344)年には創建されている。この調査では「大覚寺第Ⅱ期瓦群」のほか、DKM11型式の先行型式である「Ⅱ」を中心飾りに陽刻する複弁八葉蓮華文軒丸瓦とその系譜に連なる瓦数型式分が出土している。したがって、この出土事例については、「大覚寺第Ⅱ期瓦群」の下限年代を14世紀前葉まで下らせる資料として評価できるのではないだろうか。

このようにみてくると、第29次調査出土事例については、「元弘寺」創建年代(1331～34年頃)と同じ時期に位置づけることができるわけである。つまり、その瓦は「元弘寺」の創建瓦であった可能性が極めて高いと言えよう。そして、「元弘寺」の所在地は、瓦の出土地点が崇恩寺の現境内の隣接地にあたり、土坑SK2959という14世紀の遺構からの出土であることを勘案すれば、この場所に「元弘寺」の寺域の一角を求めて大過ないものと思われる。^(文獻17)

「元弘寺」はその後、一世紀を経過するあいだに衰退し、旧跡地だけとなったところへ、文明2(1470)年にいたり、再興されるに及んだことは先に述べたとおりである。第29次調査では遺構外ではあるが、16世紀の軒瓦1点が確認されている。中心飾りに半裁菊花7弁を陽刻する唐草文軒平瓦である。おそらく、崇恩寺の堂舎に葺かれていた瓦とみられる。

明和8年には光勝寺と東西に並立する寺院として、崇恩寺はともに絵図に描かれる。天皇勅願寺として、別個の沿革をそれぞれにもつ寺院が江戸時代には近接して存在したのである。

文献註

- (文献1) 梅本康広「古墳時代成立前後の大形建物」『京都考古』第83号 京都考古刊行会 1996年
- (文献2) 梅本康広「物集女車塚の長持形石棺」『年報 都城』29 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 2018年
- (文献3) 梅本康広「鴨田遺跡・南高北低の後期集落密度・首長墓からみた集落の特性」『継体期の王権構造と地域社会』弟国宮成立千五百年記念フォーラム資料集 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 2018年
- (文献4) 梅本康広「畿内大型横穴式石室の構造－石室規模にみる秩序形成の基礎的検討－」『研究集会 畿内の横穴式石室』横穴式石室研究会 2007年
- (文献5) 中塚良・梅本康広・辻本裕也「物集女車塚周辺遺跡第8次(7AMAMO-11地区)～物集女車塚周辺遺跡中央部～発掘調査報告」『長岡京跡・物集女車塚周辺遺跡』向日市埋蔵文化財調査報告書第61集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003年
- (文献6) 國下多美樹「中海道遺跡第29次(3NNANK-29地区)～中海道遺跡西部～発掘調査概報」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第43集 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1996年
- (文献7) 松田留美・國下多美樹「中海道遺跡第30次(3NNANK-30地区)～中海道遺跡中央部～発掘調査報告」『久々相遺跡・中海道遺跡』向日市埋蔵文化財調査報告書第60集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003年
- (文献8) ・藤井学「中世編 第4章 中般の文化と文化財 第1節 神仏の信仰」『向日市史』上巻 向日市 1983年

・向日市文化資料館『にしのおかのほとけ』企画展図録 1994 年

（文献 9） 松浦貞俊「釈 351 仁空置文」『群書解題』続群書類従完成会 1967 年

（文献 10） 上原真人「瓦類」『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告－大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査－』大覚寺 1994 年

（文献 11） 布川豊治・本弥八郎「史跡・名勝嵐山」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004－11』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005 年

（文献 12） 百瀬正恒「仁和寺」『木村捷三郎収集瓦図録』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996 年

（文献 13） 吉崎伸・高橋潔・近藤知子『東寺（教王護国寺）旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001－7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002 年

（文献 14） 泉拓良・吉野治雄「京大医学部遺跡 A018 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和 53 年度』京都大学埋蔵文化財センター 1979 年

（文献 15） 上原真人「京都における鎌倉時代の造瓦体制」『文化財論叢』Ⅱ 同朋社出版 1995 年

（文献 16） 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996 年

（文献 17） 梅本康広「中海道遺跡第 53 次（3 N N A N K－53 地区）～中海道遺跡（中央部）～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 71 集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2006 年

2 周辺の文化財

物集女城跡は、向日丘陵から派生する扇状地の上に形成された物集女の古くからの集落のほぼ中央、やや東寄りに位置する。大正11(1922)年の地図(第20図)をみると、物集女の集落は、小字中条に所在する物集女城跡からその西側の丘陵裾部まで続く竹藪地を挟んで、大きく南北二つに分かれ、それぞれに寺院や墓地が点在する。このような物集女城跡を境とする集落の景観は、在地社会の構造が大きく転換したと想像される、物集女城廃絶後の戦国時代最末期から江戸時代前期の間に形づくられ、その後、近代に入って太平洋戦争後の高度成長期に至るまで、400年近くにわたって基本的には変わることなく維持されてきたとみることができる。

物集女城跡周辺で遺跡・埋蔵文化財以外の今日に伝わる文化財は、この景観のなかの寺院で守り伝えられてきたものが多い。現在所蔵されている寺院ごとに、指定文化財をはじめとして、物集女城跡・物集女氏と特にかかわりが深いと考えられるものを紹介し、また物集女城跡を考える上で重要とみられる古文書・絵図の記載や地区の民俗行事、水利についても触れることにする。

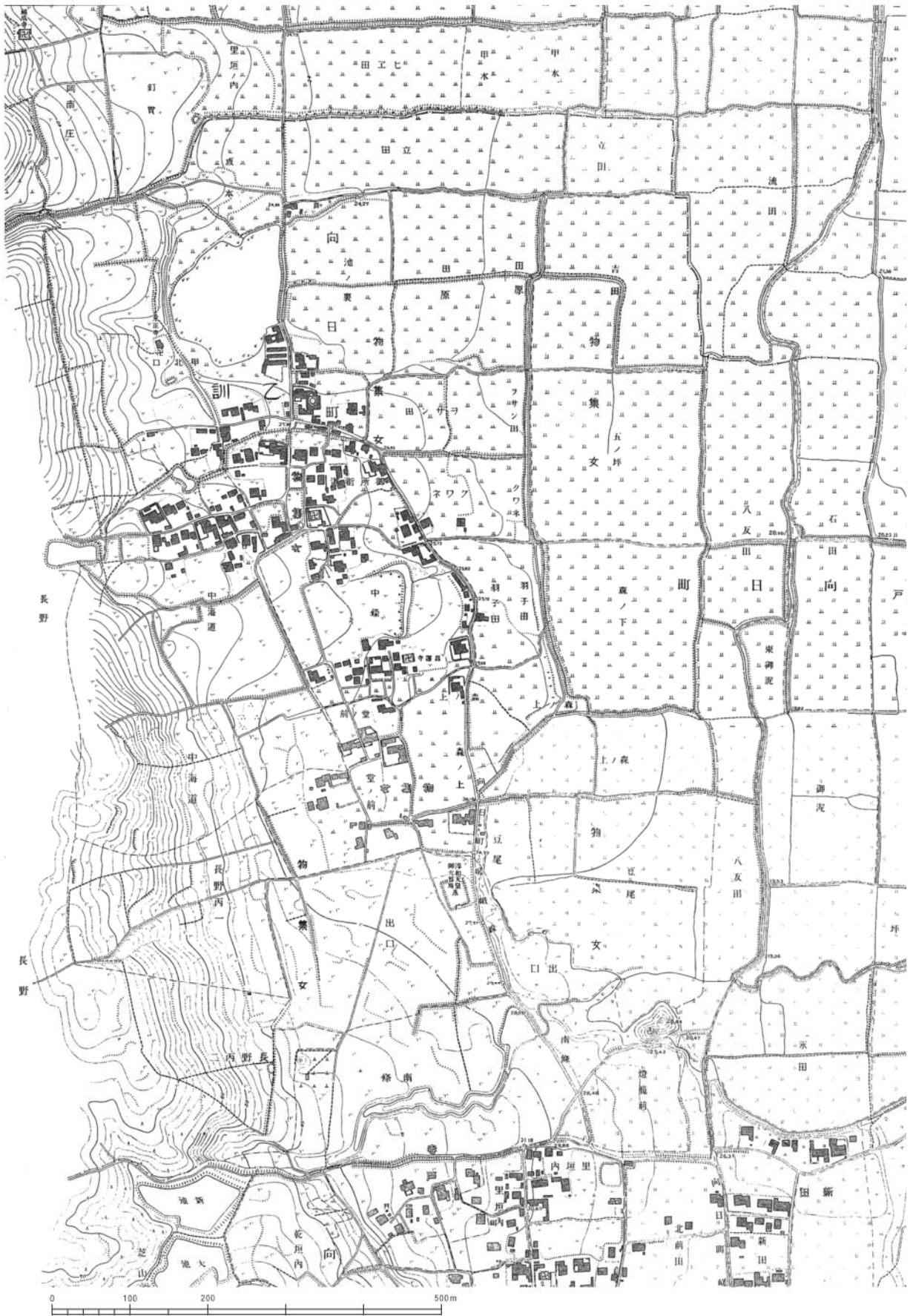
〔1〕寺院所蔵の文化財

現在の物集女地区には、北から永正寺、来迎寺、昌運寺、崇恩寺の4カ寺がある。ほかに平安時代初期に創建されたという物集女でもっとも古い由緒をもつが明治6(1873)年に廃寺となり、跡地が物集女区事務所・公民館となった光勝寺、同年廃寺と明治時代前期の記録^(註1)にあるが現在の第2向陽小学校の東側に1960年代頃までは建物や敷地があったと地元で記憶される妙玄庵、同じ記録にやはり明治6年廃寺の古跡として記される地藏堂、江戸時代中期の18世紀中頃まで物集女にあった聖聚院が、かつて物集女に存在していた寺院である。

来迎寺は、物集女城跡北側の小字御所海道に所在する西山浄土宗光明寺末の寺院で、江戸時代から地元では北条(キタンジョ)と称する城跡北側の集落の家々を、多く檀家に持つ寺院である。この境内に建つ薬師堂内には、廃寺となった光勝寺の本尊・什物が安置されている。光勝寺の廃寺出願は明治6年2月で、許可された後の同9年11月に本尊・什物が来迎寺へ移され、翌10年4月、境内に一字を建立^(註2)して安置された。現在の薬師堂は1971年9月に再建された建物である。

薬師堂の本尊、つまり旧光勝寺の本尊が薬師如来坐像(第21図①、向日市指定文化財)である。一木造、彫眼、像高50.5cmの素木像で、唇に朱彩がみられる。細かく刻み出された螺髪、おだやかに整った面相、流麗な衣文、奥行きの浅い側面など、定朝様と称される平安時代後期の典型的な特徴を備え、制作年代は12世紀末の平安時代後期とみられている^(文獻1)。来迎寺に保管される「薬王山光勝寺略縁起」(以下「略縁起」、後掲向日市文化資料館図録『戦国時代の物集女城と乙訓・西岡』〔以下、付載図録〕25頁43)は、弘仁9(818)年に天下に流行した疫病平治を嵯峨天皇が空海に詔し、空海自ら薬師如来像を彫刻し供養の法を修したところ、衆病ことごとく除かれたため、天皇の勸感により薬師如来を本尊とする光勝寺が建立されたと伝える。

薬師堂の脇壇に安置されるのが阿弥陀如来坐像(第21図②、向日市指定文化財)である。一木造、彫眼、古色、像高53.2cmで、両手とも親指と人差指で来迎印をむすび、極楽浄土から往生者を迎えに来る姿を表す。全体に温雅な気分が漂ううちにも、胸幅豊かに毅然とした風姿と抑揚ある彫法をみせる。平安時代後期の定朝様の特徴を示すが、古様な表現は、薬師如来像より古く11世紀末にさかのぼる制作とみ



第 20 図 1922 (大正 11) 年の物集女

られている。

薬師堂と来迎寺境内南壁との間の寺地に、石造種子阿闍梨曼荼羅板碑（第21図③、向日市指定文化財）が北面してたっている。この板碑と、その東隣に並ぶ宝篋印塔も、薬師堂内の什宝とともに光勝寺から移されたものである。

板碑は、現在の地上高154.8cm、最大幅90.5cm、奥行は頂上部で43.0cm、中央部で29.7cmである。上部に胎藏界曼荼羅の中央部の中台八葉院、下部に月輪を9分割して金剛界曼荼羅の中心である五智如来の種子を刻む。最下段に蓮弁を表現して蓮華座とする。『京都の石造美術』（川勝政太郎著、1972年）に掲載された写真では蓮華座の下に造り出し部があるが、現在はみえず、地中にどれほど埋没しているかは不明である。竜山石製で、もとは古墳の石棺であった石の側壁を除いて、その底に種子を刻む。梵字種子の見事な薬研彫りの彫法から、鎌倉時代にさかのぼりうる風格ある板碑として、古くから名高い。宝篋印塔（第21図④）は、その様式から、板碑よりは時代が下り南北朝期と評価されている。貞和4（1348）年の銘があるといわれているが、現状では風化がすすみ確認できない。

「略縁起」には、板碑について「（空海が）金胎の呪字を彫刻し給ふ、今猶境内にあり」と記し、宝篋印塔については、嵯峨の異母弟で次の天皇となった淳和がたびたび光勝寺に臨幸して勅願寺とし、承和7（840）年に崩御すると遺詔によって光勝寺で火葬され、その廟堂に一基の宝篋印塔を造立したことを記す。もとより石造物の年代観からも「略縁起」の記述は真実に遠く、その成立は近世より前にはさかのぼり得ない。しかし、淳和天皇を「物集村」で葬り、その骨を砕いて「大原野西山嶺上」で散骨したことは『続日本後紀』に記載され（承和7年5月13日条）、また考古学的検討からも嵯峨・淳和両天皇の時代に、天皇と物集女とのかかわりが濃厚であることが指摘されている。^{（文献2）}「略縁起」の記述にはそうした何らかの歴史的事実が反映しており、「略縁起」成立時にすでに光勝寺に存在していた石造物をも、それと結び付けたようである。「略縁起」の末尾は、文明年間（1469～87）に「物集女筑前守善継」が薬師像に帰依し、一字を建立して祈願所としたことを記しておわる。

このほかに光勝寺から移された什宝のなかで注目されるのは、八幡三神像（第21図⑤）である。薬師堂と来迎寺本堂をはさんで向かい合う鎮守八幡社（第21図⑥）に安置され、ふだん目にはできない。この神像については、改築のため旧社殿が解体された1994年に、当時向日市文化財保護審議会委員であった中野玄三氏（故人）に実見していただく機会があった。中野氏の所見では、通常の八幡三神像と構成が異なり、武神の姿をした主神に、稲荷神、愛宕神と思われる烏天狗の姿をした像の三体という構成で、きわめて異例の八幡三神像であること、形式として一木造で江戸時代以降に多い差し首であること、表面の古色がさほどないことから年代の新しい作品であること、などが指摘されている。薬師堂内に祀られる江戸期の僧侶の位牌や鑿の銘文から、光勝寺の住僧が文化9（1812）年以前に「十二神像」と「鎮守神像」を寺に寄付していることが確認できる。そして現在、薬師堂内に安置される十二神将像が八幡三神像と同時期の造像と考えてさしつかえないことから、「鎮守神像」は八幡三神像のことであり、江戸中期の像と結論づけられた。

鎮守八幡社については、明治3（1870）年の「物集女村絵図」^{（文献3）}（中山祥夫家文書）において、光勝寺境内に南面する本堂の南西に、「八幡社」が東面して描かれる。現在のところ存在が確認できる最古の記録が、享保元（1716）年10月の「寺社御改帳」^{（文献4）}（「長野山御吟味書帳」のなかの写、中山祥夫家文書）



① 木造薬師如来坐像



③ 石造種子両界曼荼羅板碑



② 木造阿弥陀如来坐像



④ 石造宝篋印塔



⑤ 八幡三神像



⑥ 鎮守八幡社

第21図 来迎寺の文化財

の光勝寺の項の「鎮守八幡宮社」であり、八幡三神像とともに近世より前にさかのぼることはできない。しかし、一般的に武家の守護神とされ、とりわけ源氏が氏神とする八幡神が、光勝寺境内に奉られていることは、中世物集女氏の系譜に直接つながるとみられる室町時代中期の物集女の代表者が源氏を称していたこと（付載図録4頁2）を考え合わせると、興味深いところである。

昌運寺は物集女城跡の南東に接し、小字中条に所在する。現在は西山浄土宗光明寺末の寺院で、明治時代前期までは昌運庵といわれた。江戸時代から南条（ミナンジョ）と称する城跡南側の家々を多く檀家に持つ寺院である。寺伝によれば、応永3（1396）年に中山道嘉を開山として創建されたという。元禄5（1692）年の「寺社御改書付」（「長野山御吟味書帳」のなかの写、中山祥夫家文書）によれば、それは文明年中（1469～87）のことと記されており、開創時期は詳らかではない。

現在、本尊は阿弥陀如来坐像で、向かって右側に安置されている地蔵菩薩坐像が昌運寺伝来の脇侍であるが、向かって左脇に、右側より大きいもう一体の地蔵菩薩坐像（第22図①）が安置されている。この像の伝来については不明である。檜材の寄木造、彫眼、古色、像高86.0cmで、左手に宝珠を捧げ、右手は錫杖（現在は欠失）を持つ姿である。全体に黒色を呈するが、もとは彩色像であったと考えられている。後補の部分が多く、衣文の彫りがつぶされ明快さを欠くことが惜しまれるが、なおかなりの程度に鎌倉彫刻の安定した特色を留めている像と評価されている。

この昌運寺に、「静室宗入居士」こと、中世物集女氏最後の当主である物集女宗入（疎入とも）を中興開基の一人とする位牌が祀られていることが、2017年3月に松田道観氏（大本山清浄華院史料編纂室研究員）と同寺の脇田修司氏によって再確認された。位牌（第22図②）は、表に「中興開基」として4人の法名を記し、そのうちの一人が「静室宗入居士」である（付載図録25頁）。背面には「天正三乙亥十月二日」と、宗入を討ち取ったことを承認する織田信長黒印状（付載図録17頁33）から読み取れる宗入謀殺の日に近い日付があり、その横に宗入を示すと考えられる「小笠原筑前守」、下に位牌の施主として中山姓の2人と並んで「当寺現住矩道建之」とある。この「矩道」については、明和8（1771）年の「長野山見分絵図」（巻頭図版第8）の裏書に関係者の一人として署名する「光勝寺 矩道」と同じ人物とみられる。位牌そのものの制作年代も、形状から江戸時代中期とみて矛盾しないことから、「当寺」とは光勝寺のことである可能性が高い^{（註3）}。そうであれば位牌は、光勝寺の中興開基として物集女宗入を含めた4人を祀るために作られ、光勝寺に安置されていたことになり、明治6年の廃寺後に昌運寺に移されたことが想像される。

これまで中世物集女氏については、地元では小笠原氏の伝承しかなく、勝龍寺城下で細川藤孝方によって謀殺された歴史を憚って、あるいは意図的に隠されたとも考えられてきた。しかし近年になって、江戸中期まで物集女に存在した聖聚院では宗入が開基として祀られていたこと（付載図録25頁40）がわかり、それに続いて、この位牌が再確認されたことによって、江戸時代の物集女では、最後の当主となった物集女宗入を各所で祀っていたことが明らかとなった。

永正寺は、物集女の古くからの集落から北西にやや離れた向日丘陵の東斜面、物集女でかつてもっとも貯水量が豊かであった大池を望む小字北ノ口に位置する。曹洞宗永平寺末の禅宗寺院で、明治時代前期^{（註4）}の記録には、永正元（1504）年に「物集女ノ県主小笠原筑前守源善次」を開基として草創された由緒を記す。開山は宗祖道元から13世の孫にあたる紀州安楽寺住持の大巧正拙和尚で、筑前守が大巧和尚



① 木造古色地藏菩薩坐像



② 中興開基位牌



③ 木造漆箔釈迦如来坐像



④ 小笠原筑前守善次位牌

第 22 図 昌運寺・永正寺の文化財

に帰依して開山に迎えたという。さらに往古の寺領は田畑 200 石・山林 4 万余坪で除地であり、寺格は京都五山の列に次ぎ、末寺 15 カ寺、京都所司代から制札を受ける寺院であったと記す。江戸時代中期の『拾遺都名所図会』には、池の横の寺への入口脇に制札屋形がたち、広大な境内を登っていった上に本堂や方丈を構える当時の景観が、挿図として掲載されている（付載図録 26 頁）。

その永正寺の本尊が、釈迦如来坐像（第 22 図③）である。木造漆箔、像高 46.5cm、檜材を用いた寄木造で、両眼には水晶をはめこむ。法衣を着け、両足を組んで正面向きに坐る。両手とも五指を伸ばし、右手は臂を曲げる施無畏印、左手は軽く左膝の上に置く与願印を示す。法衣の衣文は写実風に流れ、鎌倉時代以来の写実技法を身につけた仏師の作と考えられている。様式的に、記録が伝える創建年代である永正頃に本尊として造立されたものと推定でき、京都近郊における室町彫刻の実態を知る上で貴重な作例と位置づけられている。

永正寺本堂内の本尊背後の壇には、開基である小笠原筑前守善次の位牌（第 22 図④）が、開山大巧正拙和尚像と並び安置される（付載図録 27 頁）。表面上部に小笠原氏が家紋とする三階菱が入り、その下に「物集女県主 永正寺殿小笠原筑前太守源善次竺心善慶大居士」、背面に「享禄二年己丑正月十六日」と文字を刻む。位牌の形状は古様を示し、制作は近世より前にさかのぼるとみられる。享禄 2（1529）年正月 16 日が小笠原善次の命日で、最後の当主宗入没年の天正 3（1575）年から 46 年前、2～3 世代前の人物にあたるが、当該期の史料に小笠原ないし物集女善次の名は今のところ確認できない。

永正寺は、小笠原氏（＝物集女氏）創建の寺院であり、物集女城が機能し物集女氏が活動した同時代の本尊と位牌を伝える重要な寺院である。次項で述べるように、近世以降の物集女において、中世物集女氏にかかわる事跡のすべてが小笠原（または物集女）筑前守善次（継）の名で語られるのは、中世物集女氏と同時代の所産として唯一、地元に伝わったこの位牌に刻まれた名前だったからと想像される。

崇恩寺は、小字中海道に位置し、旧光勝寺境内である物集女公民館の南西に接して広い寺域を有した寺院である。臨済宗天龍寺末であり、中世から、物集女庄域内におかれた領主天龍寺直属の塔頭として重要である。物集女宗入が維持にかかわっていたことや、宗入が勝龍寺城下で謀殺された直後に崇恩寺本尊が勝龍寺に持ち去られたことを記す同時代の古文書などが天龍寺文書のなかに伝わる（付載図録 17 頁 34、23 頁 39）^{（文獻 5）}。物集女城跡を考える上で最重要寺院であるが、近世以降は足跡をたどれる史料に乏しく、大正 11 年の第 20 図でも確実に存在している位置に寺院の表現がなく竹藪記号がひろがる。今日に至るまで調査の実績がなく、新たな資料の博搜も不十分で、今後の課題である。

〔2〕物集女城跡周辺の石仏群

周辺の文化財として提示すべきものに、城跡近くの数カ所にまとまって存在する石仏群がある。まず物集女城跡内郭のすぐ北側で、内郭から続く西に高く東が低い段差のある地形の縁に沿って、15 個体ほどの五輪塔の各部材や一石五輪塔、石仏が置かれている（第 23 図①）。そこからさらに北へ向かった突き当たりが来迎寺であり、南東隅に多くの石造物を集めた場所がある（第 23 図②）。来迎寺表門の東側には小祠があり、なかに 10 個体ほどの石仏を祀る（第 23 図③）。東側には数多くの石仏や一石五輪塔が無造作に集められており（第 23 図④）、なかには近世より前にさかのぼるとおぼしき、かなり肉厚の単尊仏も認められる。

1992 年に北外郭で実施された中海道遺跡第 21 次調査では、北堀の縁から 10 m ほど北に離れた位置



① 物集女城跡内郭北側の石仏群



② 来迎寺南東の小祠と集められた石仏群



③ 来迎寺南東小祠内の石仏



④ 来迎寺南東小祠脇に集められた石仏群



⑤ 参考 中海道遺跡第 21 次調査 土坑 S K 2122 から約 20 個体出土した石仏の一部

第 23 図 物集女城跡周辺の石仏群

で一部分が検出された近世の土壌から、約 20 個体の石仏と五輪塔の地輪 1 個体が発見された。出土した石仏のなかには単尊仏のほか、上部を山形に作り出す二尊仏もみられる（第 23 図⑤）。

かねてより城跡周辺に点在する石仏群は、物集女城が機能した時代、特にその廃絶期と、年代的に近く、注意がはらわれてきた。1 個体ごとの詳しい調査とその分析は、今後の課題である。

〔3〕物集女地区に伝わる古文書・絵図

物集女地区内に伝来する古文書類に関しては、物集女城や物集女氏に直接関係する近世より前にさかのぼる史料は確認されていない。^(文獻 6)しかし、江戸時代の物集女村で由緒として語られたなかに、物集女氏と村との関係を示すものがある。まとまった内容を伝えるのが、すでに〔1〕寺院所蔵の文化財で紹介した、明和 7（1770）年 9 月からの「長野山御吟味書帳」（中山祥夫家文書）と、翌年の「長野山見分絵図」（中村家文書）である。あらためて概要を述べる。

「長野山御吟味書帳」は、村西部の「長野山」、つまり向日丘陵の東斜面について、村内の人が他村の人を頭取とした開発申請を奉行所へ提出したことを発端に、これまで無年貢地であり、用水涵養の地であり、また木柴や下草を燃料や肥料に利用してきた長野山について、物集女村が村民をあげて開発を阻止した記録である。作成文書や参考事項を調べた資料の写しも含め、一件記録として冊子にまとめられている。

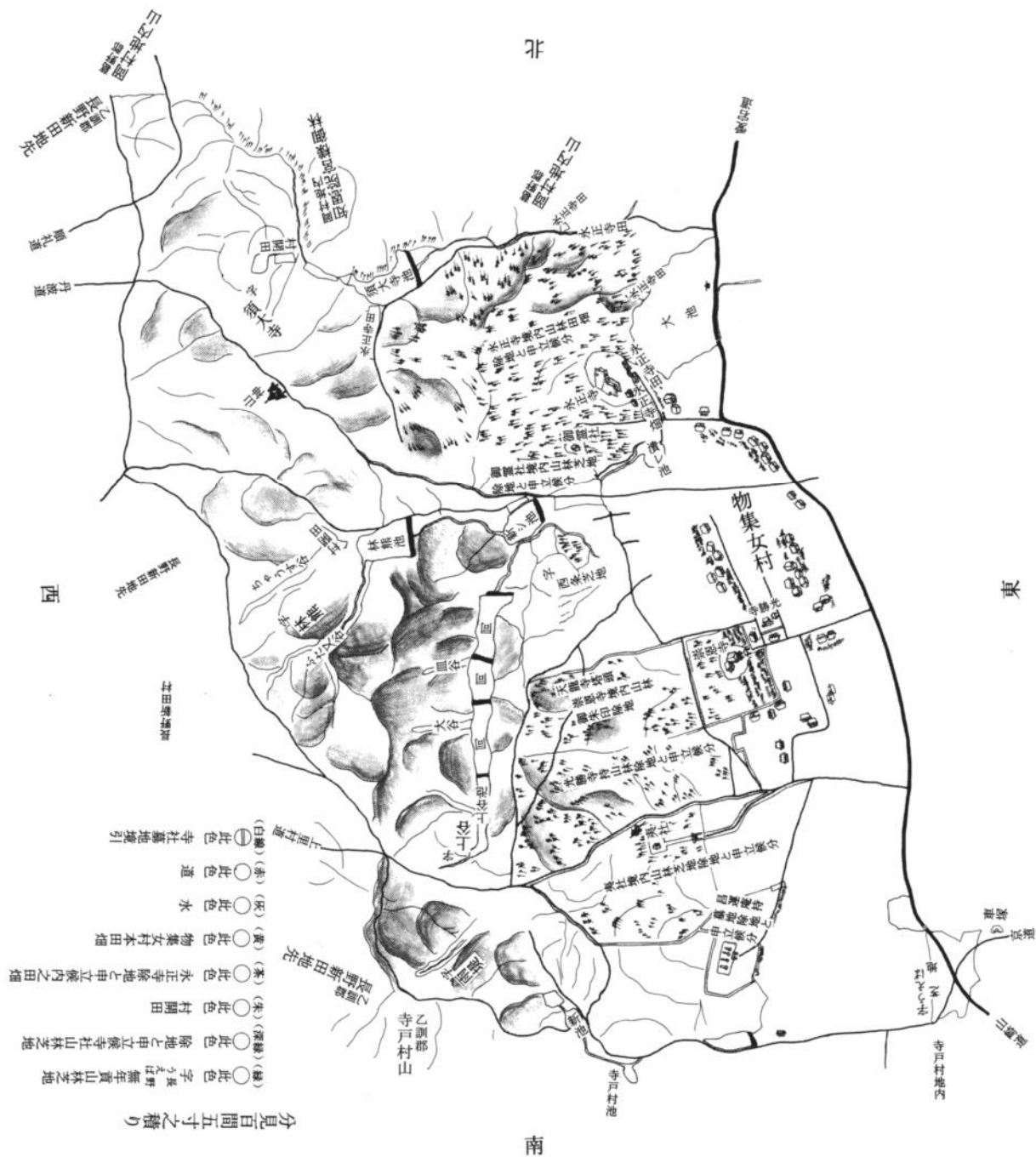
「長野山見分絵図」（巻頭図版第 8、第 24 図はその解説図）は、いったん開発が物集女村の支配に委ねられた明和 8 年 2 月に、京都代官所の役人が実地見分して作成した絵図である。作成目的である長野山は谷筋などまで精緻に見分の成果を反映させるが、東部の水田は省かれ、山に権利を持たない来迎寺や昌運庵の寺地はまったく描かれない。昌運庵は墓地のみ丘陵の裾にまとまった広さがあるため記載される。物集女城跡に関しても、当時も存在していたはずの東堀は表現されない。しかし、物集女村の姿を絵画的に表現した絵図としては、ほとんど唯一のものである。

ここで注目されるのは、吟味帳に書写された寺社改めである。各寺社が山に何らかの權益を保有することを証明しようとする史料であり、元禄 5（1692）年 6 月、享保元年（1716）10 月、享保 17（1732）年 8 月のものがある。年により記載する寺社が若干異なるが、寺では永正寺・崇恩寺・光勝寺・聖聚院・昌運庵・来迎寺、社では御霊社・夷社と光勝寺内の鎮守八幡社が記される。御霊社と夷社は絵図によれば村の北と南の丘陵地内に立地し、南北それぞれの鎮守とみられる。これら 8 ヶ所の寺社のうち、永正寺・光勝寺・聖聚院・御霊社・夷社で、「物集女筑前守源谷次（谷は善の誤写）」が、永正または天正年間に建立・造立の由緒を記し、物集女氏による再興や援助を物語る^(文獻 7)（付載図録 26 頁 44・45）。

〔4〕神役仲間と年中行事

物集女地区の伝統的な神事・行事の多くを取り仕切るのが物集女神役仲間である。物集女で祭礼の神役について記されたもっとも年代の古い文書は、万治 2（1659）年 4 月 4 日付の覚書で、当時、向日神社の祭礼に南条は侍 12 人、北条は侍 4 人が神役を勤め、人足も神役の人数に応じて出すことになったものである（付載図録 27 頁 59）。しかしやがて北条は神役を勤めなくなり、江戸時代のある時期から物集女の神役は南条の 12 人のみが毎年勤めるようになり、神役の人数は現代にやや減少して今日に至っている。

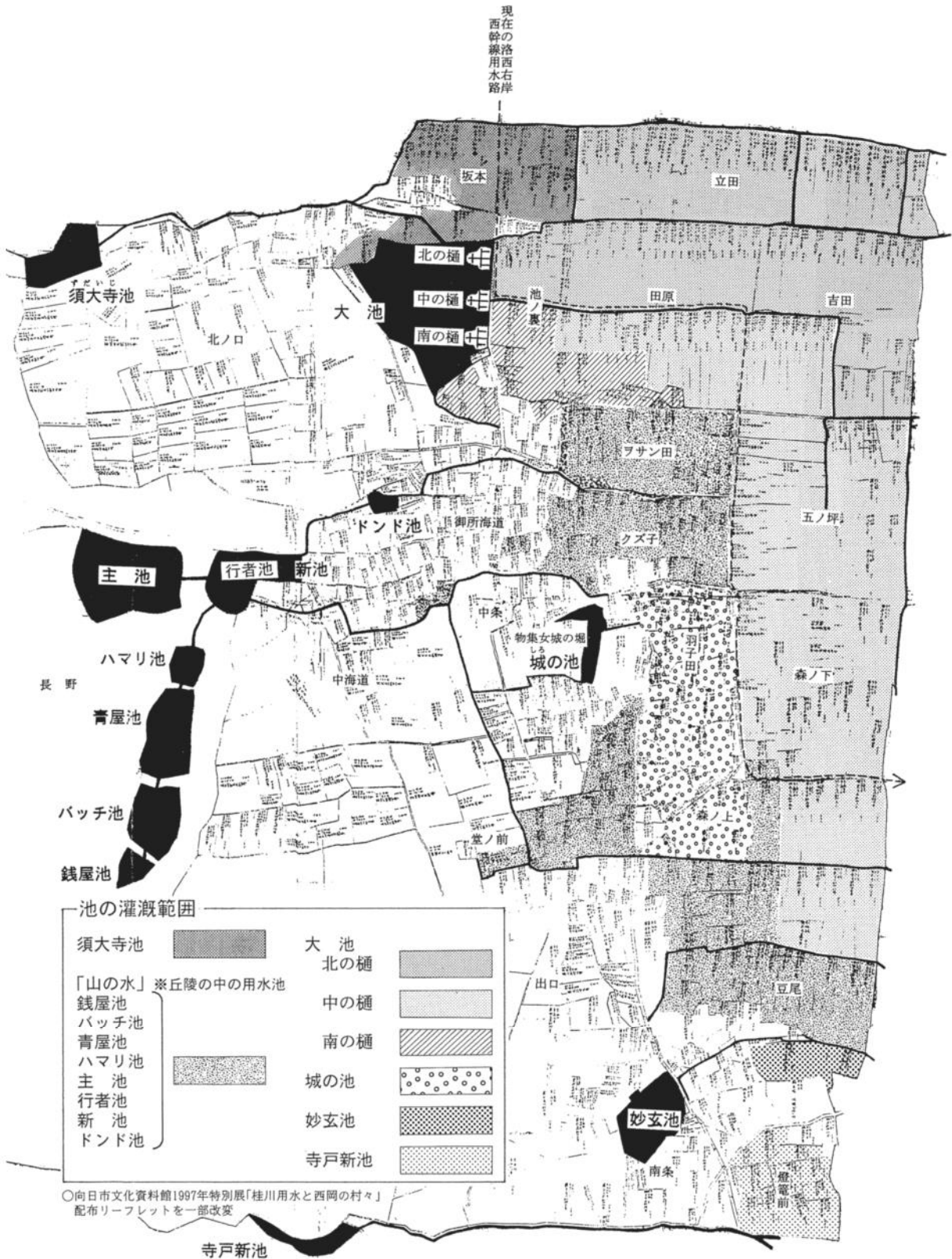
乙訓周辺の神社奉斎組織、いわゆる宮座では、原則として地区の全戸の当主が加入し、年齢や入座の



第24図 長野山見分絵図 解説図

順序によって全員が順番に役を勤める場合が多く、向日神社氏子を構成する他の地区も同様であるが、物集女では、特定の家の当主が地区全体にかかわる行事に従事することが特徴的である。また神役仲間は、江戸時代から光勝寺を管理し、現在も来迎寺薬師堂で営まれる1月の修正会（オコナイ）を取り仕切る（付載図録27頁）。さらに、現在では行事名のみ伝わり実態はないが、かつては1月下旬に武射（ビシャ）という行事があり、各地に残る年頭に的を射る行事が物集女にもあったようである。

神役仲間の方々からは、今から30年ほど前には「小笠原氏の一族」または「家来の家筋」という話が聞かれた。また組織形態や行事内容からも、物集女氏の存在を背景に武士的な要素がうかがわれる。



* 1 1997年に物集女農家組合の協力を得て当時水利土木委員長であった安田達夫氏（故人）からの御教示をもとに作成

* 2 ベースマップには明治10（1877）年6月15日付物集女村全図（山田俊男家文書）を使用

第25図 物集女地区の水利

〔5〕物集女地区の水利

向日丘陵沿いに立地し、比較的高い場所に耕地がひろがる物集女では、遠く嵐山付近で桂川から引水する用水は下流にあたり水利権が及ばず、古代以来の水路で知られる寺戸川（中世の今井用水）はより低い位置を流れるためもともと利用できなかった。物集女は、向日丘陵や段丘縁辺に設けた用水池で灌漑する、池がかりの地区である。西部の向日丘陵には谷筋を利用した用水池が連なり、そこから比較的高い段丘上の水田を、段丘縁辺に設けた大池からは、より低位の水田を灌漑した（第25図）。

物集女城跡の東堀は、「城の池」と呼ばれ、池がかりの一部を担う。東堀には、丘陵地の池から行者池を経て、城跡南辺の水路を通して水が入る。東堀から東へ流れ出る水は、小字羽子田（ハネは堤、堤状に高い田の意）と森ノ上の一部の高位の水田を潤した。近年は東堀から水が東へ流れず、羽子田での水田耕作はしばらく行われていないという。ともあれ、城跡の堀が灌漑を担うことは、中世天龍寺領物集女庄の経営と、物集女城や物集女氏との関係や役割を想起させる上でも、重要な要素である。

以上、周辺の文化財を概観したが、物集女城や物集女氏の活動年代に属する文化財は、現在の地区内には永正寺以外にはみられず、より古いか、または後の時代に属する。しかし今日に続く集落が城跡を境に形成され、文化財や伝統的行事の場で物集女氏との由緒が語られるなど、現在の景観や人びとの営みのなかに、城跡と物集女氏の存在を認めることができる。

註

- (1) 「(物集女村)村誌」(「山城国乙訓郡町村誌」(京都府地誌22)、京都府立京都学・歴史館所蔵)
- (2) 「乙訓郡寺院明細帳」(京都府立京都学・歴史館所蔵)の来迎寺の項。
- (3) 松田道観氏のご教示による。
- (4) 註2史料の永正寺の項。

文献註

- (1) この節の仏像彫刻・石造美術に関する記述は、全般にわたり以下を参照した。
 - ① 毛利久「美術の華」・「中世の美術」『向日市史』上巻 1983年
 - ② 向日市文化資料館『にしのおかのほとけ』企画展図録 1994年
 - ③ 向日市文化資料館『むこうしの文化遺産』特別展図録 2009年
- (2) 梅本康広「歴史的環境」『物集女城跡 向日市埋蔵文化財調査報告書』第113集 向日市教育委員会・公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 2019年
- (3) 向日市文化資料館『むこうし・おとくにの絵図・地図・写真』企画展示図録 2013年
- (4) むこうまち歴史サークル・向日市文化資料館『長野山開発吟味書帳』2012年
- (5) 玉城玲子「天龍寺・臨川寺の寺辺・近傍所領」『天龍寺文書の研究』2011年
- (6) 向日市文化資料館『京都府向日市物集女地区古文書調査報告書』1998年
- (7) 玉城玲子「城主物集女氏の実像を探る」『京都乙訓・西岡の戦国時代と物集女城』中井均・仁木宏編 文理閣 2005年